後悔と自責❶

被爆者の多くは、生き残ったことへの負い目を感じ、目の前で苦しむ人を救えなかったこと、水を飲ませなかったことなどを悔やみ、自らを責めました。心に秘めた辛い記憶を絵にすることは、作者にとって償いと鎮魂につながる行動でもあったのです。

重傷者を踏んで逃げ出す

❶山本節子　❷14→43　❸8/6　❹幟町

紺の絣の着物を着ていた老婆の背に上がってから外へ飛び出た。

「先生助けてー」

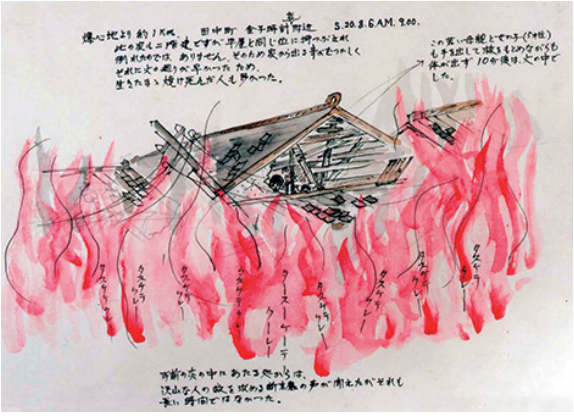
❶松村智恵子　❷33→62　❸8/6　❹的場町二丁目

倒れた校舎のすき間から、頭と右手を出して声を限りに助けを呼ぶ生徒がいた。助けようとしたが、倒壊したモルタルは私一人の力ではびくともしなかった。「先生助けてー」その声が今も耳元に聞こえ、たまらない気持だ。

「助けて！手がイタイ、イタイ」

❶加藤義典　❷17→73　❸8/6　❹的場町二丁目

頬ずりをしてあげられる程、体は外に出ているのに、片腕が柱と柱に押しつぶされて引き出せなかったのです。「もうすぐ楽になるからね」といって手をあわせました。



炎に飲みこまれた母子

❶松室一雄　❷32→61　❸8/6　❹田中町

「助けてください。ここです！」5歳くらいの女の子を抱き、必死に手を振る若い母親。狂ったような子どもの泣き声。近寄ったものの、どうすることもできない。その場を逃げるようにして離れ、後ろを見たとき、母子の家は大きな炎に飲みこまれていた。